

# 博物館と学校教育の融合を目指して

—「出前授業」「博学合同研修会」の取り組みを通して—

田 村 宜 也

## 1 はじめに

「資料館を授業で活用したいが、手続きはどうしたらよいのだろう」

「資料館は学校の要望をどこまで聞いてくれるのだろう」

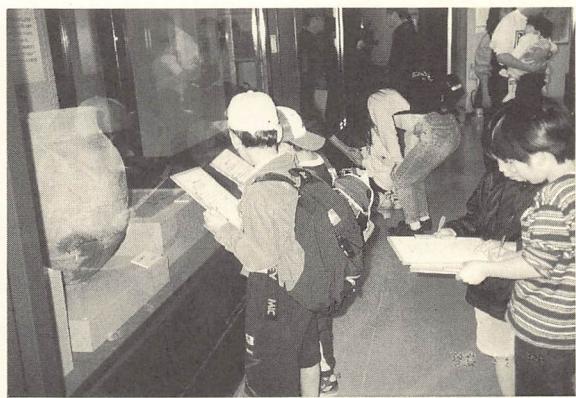
「資料館と連携することで、学校でどのような取り組みが可能になるだろう。また、子どもたちにどのような力が培われるのだろう」

「資料館を活用することで教師の負担が大きくなりはしないだろうか」

今年4月より資料館勤務となり、実際に多くの質問を学校の先生方より受けた。

今、学校は大きく変わろうとしている。昭和59年からの臨時教育審議会において、生涯学習体系への移行が教育改革の視点の一つとして示された。そして平成8年7月、中央教育審議会はこれからの教育の基本方針として、子どもたちに学校、家庭、地域社会全体を通して「生きる力」をはぐくんでいくことを提言した。以来、単に学校だけを教育の場として考えるのではなく、子どもたちの体験的な学習の場を広げ、豊かな社会性をはぐくんでいくために、学校は関係施設との積極的な連携を図るようになってきた。また、平成10年7月、教育課程審議会は平成14(2002)年度からの学校週5日制の完全実施を踏まえた新しい教育課程の基準について発表したが、その中で「教育は学校教育のみで完結するのではなく、学校教育では生涯学習の基礎となる力を育成することが重要である」との考え方を示し、地域社会の人材・施設との連携を図った特色ある教育活動を各学校で展開することを求め、それをうけた新しい学習指導要領が同年12月に告示された。

一方、博物館側としても生涯学習社会を迎えた今日、その基礎づくりの場となる学校教育との連携は不可欠なものとなっている。博物館法から見ても博物館が学校教育を援助することは今までもないが、社会教育審議会や生涯学習審議会の各答申においても度々その必要性や重要性が叫ばれてきた。そして平成10年9月、生涯学習審議会は「子どもたちの生きる力をはぐくむため学社融合の必要性が言われ、様々な場面で取り組みが始まっているが、いまだ学校教育と社会教育の連携は不十分と言わざるを得ない。学校教育と学校外教育があいまって、子どもたちの心身ともバランスのとれた育成が図られること



当館を活用し各自の課題に取り組む子どもたち

となる。昨今の子どもたちを巡る環境を考えると、早急に学社融合の実をあげていかなければならぬ」とその不十分さと緊急性を指摘している。

当館では、毎月第2・第4土曜日や学校の長期休業日を中心に、考古及び民俗に関する様々な体験学習的な教育普及事業を展開してきた。そして、最近では学校に出向いて授業に協力する「出前授業」や当館を授業の場とした実践を積極的に展開し、学校教育との連携・融合を深めている。これらのことは渡辺勤氏（現埼玉県立北教育センター指導主事）より報告がされているとおりである（当館『調査研究報告』第9号、第10号、第11号参照）。本稿では、こうした今までの取り組みの中から、特に今年度学校教育に直接的に関わった「出前事業」と「博学合同研修会」についてアンケート調査等をもとにその成果や課題をあきらかにすることにより、今後の博学連携・融合の一層の充実と発展を図ろうとするものである。

## 2 博学の効果的な連携を 求めた「出前授業」

博物館等が学校の授業に直接関わる取り組みとして、博物館を直接授業の場として活用する「博物館授業」、博物館職員が直接学校に出向いて授業に協力する「出前授業」、資料のみをある一定期間貸し出す「巡回展」等がある。博物館側にも学校側にもそれぞれメリット・デメリットはあるものの、各館や各学校の実態に応じた取り組みが各方面で展開され、いずれも博学連携・融合という面において大きな成果をあげていることは周知の通りである。

当館では、平成8年度より「出前授業」を積極的に実施している。各学校からも大変に好評を得ており、社会科や特別活動の年間計画に当館との連携を位置づけ、意図的・計画的に実施する学校も年々増えてきた。また、各学校からの紹介により、かなり遠方の学校からも依頼を受けることがある。今年度も北埼玉地区の学校を中心に「まが玉作り」（9校）をはじめ、「はにわ作り」（1校）や「昔の農具をさわってみよう」（2校）等の体験的な学習に関わってきた（12月現在）。

### （1）事前打ち合わせの充実

学習の計画を立てるにあたっては、当然のことながら担当の先生にできる限り来館していただくようにしている。連携の効果を最大限に發揮するためには、双方の綿密な打ち合わせが極めて重要だからである。打ち合わせでの主な内容は次の通りである。

- ①日時、実施教科、学年、人数、活動場所と確保できる時間の確認
- ②単元におけるねらいと位置づけ（学習指導要領、児童生徒の実態等を踏まえて）
- ③学習の内容と必要な資料の確認
- ④学校（教師）と資料館（職員）の役割の明確化



「出前授業」で昔の農具を体験する子どもたち

## ⑤具体的な学習計画の作成

これらの内容については、打ち合わせを効率的に行うために事前に連絡し、打ち合わせ当日には素案を準備していただき、それを確認しながら話し合いができるようにしている。対応は主として教育普及担当が行うが、場合によっては他の学芸員にも協力をお願いし、より専門的な立場から指導・助言をいただくこともある。以下、小学校6年生の社会科の授業において「まが玉作り」に関わったときの実践例を紹介する。本実践は、学習課題の解決及び課題の発展を目的として行った「出前授業」である。

### 1 単元名 「大山古墳のなぞ」

#### 2 単元のねらい

大山古墳について調べることを通して、むらやくにが大和朝廷により統一されていったことをとらえ、新聞にまとめることができる。

#### 3 学習計画（6時間扱い）

- ①大山古墳について調べてみよう
- ②③全国の大きな古墳について調べてみよう
- ④⑤埼玉の古墳時代を調べよう（本時）
- ⑥大和朝廷の国土統一について新聞にまとめよう

#### 4 本時のねらい

- 大和朝廷が国土を統一していった頃の埼玉県の様子や大和朝廷との関わりについて、資料館職員の話を聞いたり、県内からの出土品等を見ることにより理解を深めることができる。
- 埼玉県の県章にもなっているまが玉を作る体験を通して、歴史を身近に感じ、これから学習への関心・意欲を高めるとともに郷土に対する愛情をはぐくむことができる。

#### 5 本時の展開（4・5／6）

### 単元の課題 「大山古墳のなぞを探ろう！」

教師の働きかけ	主な学習活動	資料館職員の働きかけ	資料
<ul style="list-style-type: none"><li>・資料館職員とのT.Tを知らせる。</li><li>・既習の学習内容・課題について確認する。</li><li>・スライドの操作や資料提示の補助を行う。</li><li>・各自の課題を踏まえた質問をうながす。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>①ゲストティーチャー（資料館職員）について知る。</li><li>②大和朝廷の国土統一について復習する。</li><li>③ゲストティーチャーから古墳時代の埼玉県の様子について話を聞く。</li><li>④課題の解決に向けて質問する。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・自己紹介をする。</li><li>・当時の埼玉県の様子について想像させる。</li><li>・埼玉古墳群を例に当時の埼玉県の様子や大和朝廷との関わりについて話をする。</li><li>・児童の質問にわかりやすく答える。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・OHP 全国の前方後円墳の分布</li><li>・スライド 埼玉古墳群 金錯銘鉄剣</li></ul>
<ul style="list-style-type: none"><li>・材料の配布を行う。</li><li>・子どもたちを個別に支援する。</li><li>・子どもたちに新たな課題を持たせる。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>⑤まが玉について説明を聞き、まが玉の歴史や作り方について知る。</li><li>⑥まが玉を作る。</li><li>⑦完成した作品を見せ合い、わかったことや疑問点についてまとめる。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・まが玉の歴史や作り方等について説明する。</li><li>・子どもたちを個別に支援する。</li><li>・新たな疑問に対して答える。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・埼玉県旗</li><li>・体験学習のしおり</li><li>・感想用紙</li></ul>

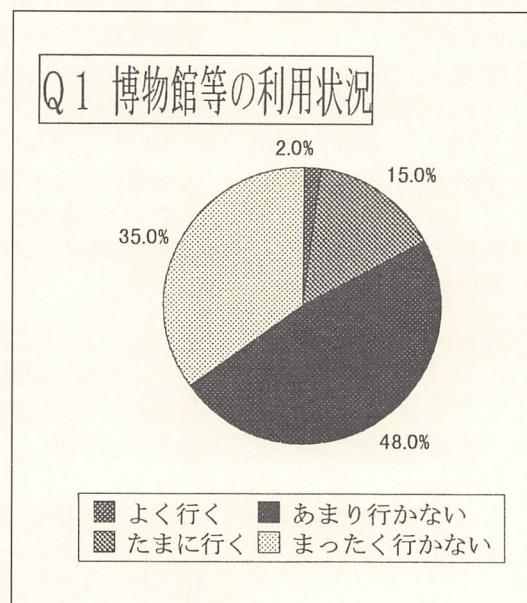
事前打ち合わせを行うまでの課題だが、学校が遠方であったり先生方が忙しいために思うように時間がとれないことである。来館しての打ち合わせが無理な場合も多く、その場合電話やファクス等での対応になってしまう。しかし、綿密な打ち合わせというものにはならず、当日の授業においてもスムースに運ばないことが多い。また、学校によっては博学連携・融合という意識にはほど遠く、単なる思いつきの博物館利用で連絡をいただくところもある。授業に対しても、時間を設けるので内容は当館で考えてほしいというものである。そのような場合、あくまでも授業構成の主体は学校であることを告げ、当館の概要と実施できる授業のプログラム及び他校の実践例を紹介し、それらをもとに博物館等と連携するねらいを明確に位置づけた実践の必要性を説明している。大切なことは、できるだけ機会を逃さず、多くの学校に博物館等との連携・融合の場を設定してもらい、その輪を広げ意識を啓発していくことだと考える。

また、今年度は「出前授業」に関わり、農具の実物資料の借用希望が2件あった。当館では国の重要有形民俗文化財に指定されている1640点の「北武藏の農具」をはじめとする約3000点にもおよぶ民俗資料を所蔵するが、それらは体験的な学習への活用を考えて収集されたものではない。結果的には当館実施の「民俗季節展」で活用している登録外資料により対応したが、今後は調査・整理・保存のみならず活用ということも念頭に置き資料を収集し、学校側のニーズに柔軟に応えていく必要性を感じる。いずれにしろ、学校への運搬や管理の方法はもちろんのこと、これから博物館等の役割をどう考えるかについても館内の共通理解を早急に図らなければならない。

## (2) 子どもたちの意識と授業の効果

さて、このような「出前授業」に対して、学習の主体者である子どもたちはどうとらえているのだろうか。以下、授業を行った学校に協力していただいたアンケートの結果をもとに子どもたちの博物館等に対する意識や授業の効果について分析・考察していきたい。なお、アンケートは小学校4校(285名)、中学校3校(133名)の結果を集計したものである。

まず、授業の前に、子どもたちの実態を把握するため、博物館等に対する利用状況やイメージについて聞いてみた。Q1を見ると、博物館や資料館に普段から「よく行く、たまに行く」の合計17%に対して「あまり行かない、まったく行かない」が合計83%と大きく上回り、博物館等が子どもたちにとって身近な存在となっていないことが分かる。これは、Q2からも分かるように博物館等に対して「つまらないところである」というマイナスイメージが大きく働いていることが一つの要因として考えられる。その理由としては「展示内容やその説明(キャプション)が難しい」ことや「見ているだけで体験がなかなかできない」ことや「施設の中では静かにしていなくてはならない」こと等を子どもたちはあげてい



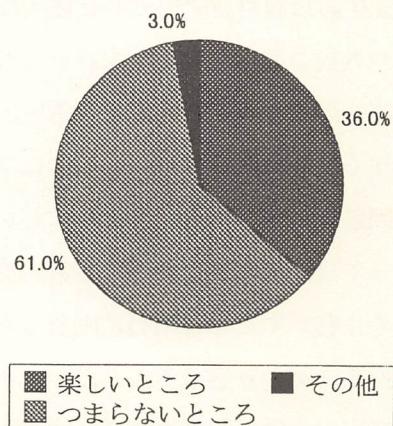
る。無論、先進的な取り組みをしている博物館等もたくさんあり、また子どもたちの意見を全て鵜呑みにし受け入れることがよいことではないが、年間の入館者に占める小・中学生の割合がかなり大きなことから考えても、このような意見が多く見られることを謙虚に受け止め、子どもたちの博物館等に対するマイナスイメージを払拭する努力がさらに必要ではないだろうか。一方、「楽しいところ」というプラスイメージをもっている子どもたちの理由としては「新しい発見や知識を吸収できる」ことや「自分の知らない文化をいろいろと知ることができる」等の前向きな意見が多かったことも記しておきたい。

今後、学校との連携・融合を図ることにより日常的に博物館等へ出掛ける機会を与え、少しでも多くの子どもたちがプラスイメージが持てるよう努めすることが肝要である。

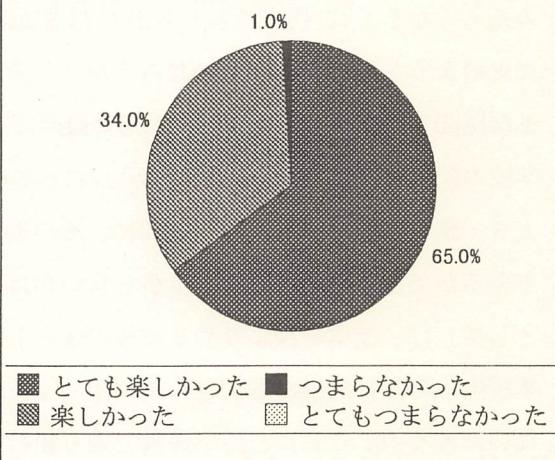
Q3以降では、「出前授業」に対してどのように子どもたちがとらえたのかを聞いてみた。Q3を見ると、授業を「とても楽しかった。楽しかった」と答えてくれた子どもたちが99%ものぼり、「出前授業」の学習効果の大きさをうかがい知ることができる。その理由はどのようなところにあるのだろうか。Q4を見ると、今回の学習で楽しかった（勉強になった）ところとして「実物を見たりさわったり、ものを作る」ことや「資料館の先生のお話」が大きな割合を占めていることが分かる。逆に、Q5では、つまらなかった（興味がもてなかつた）ところとして、ほとんどの子どもたちがうれしいことに「特になかつた」と答えている。つまり、実物資料を活用したり、先人の知恵や苦労が実感できるような体験的な活動をしたり、資料館の職員という専門的な立場からの解説や支援が子どもたちを授業に引きつけたと考えられる。もちろん、先生方の普段の授業における努力や事前の綿密な打ち合わせがその基盤となっていることはいうまでもない。

それでは、このような授業は博物館等との連携が

## Q2 博物館等に対するイメージ

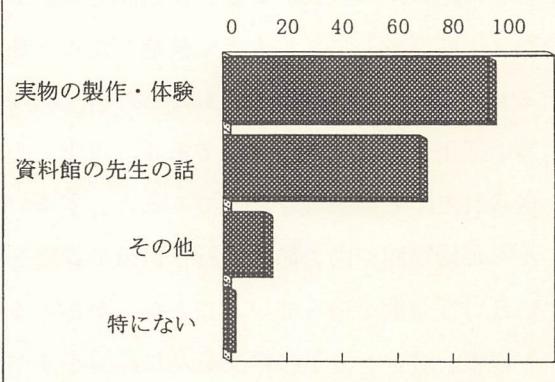


## Q3 出前授業の感想



## Q4 楽しかったところ (勉強になったところ)

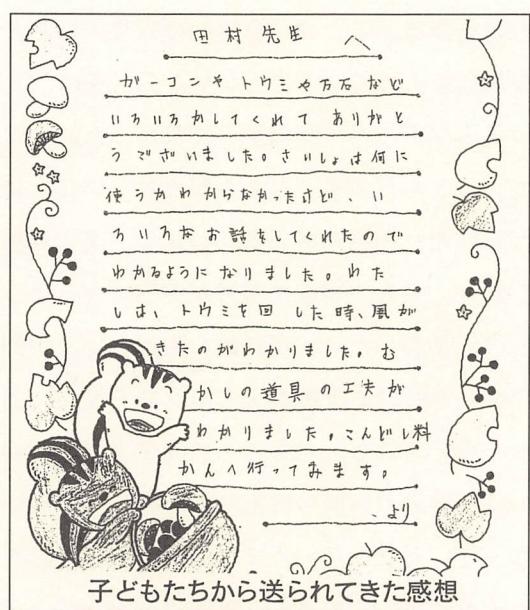
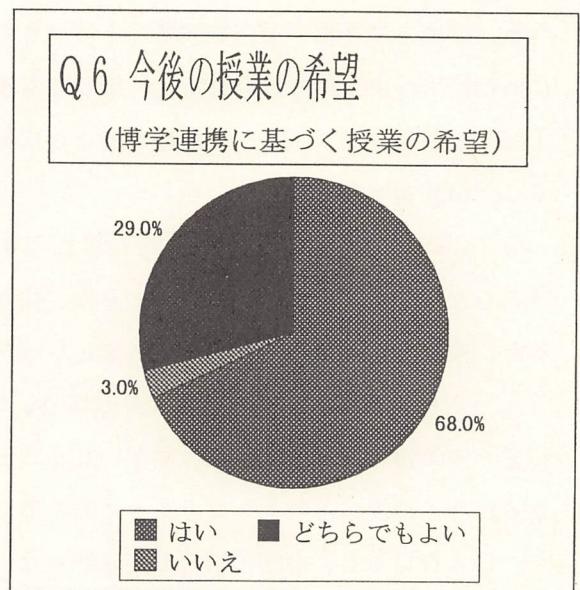
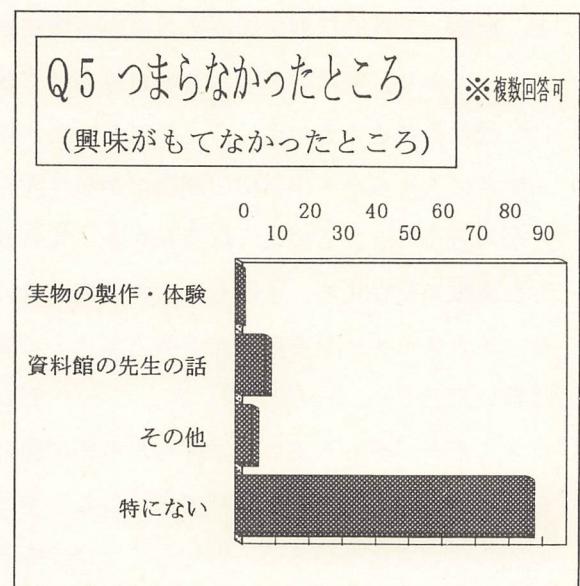
※複数回答可



なければできないのであろうか。もちろん、工夫と努力次第では可能であろう。しかし、そのために学校の先生方は教材研究のために膨大な時間を費やし、教材や教具の準備に奔走しなければならない。まして、実物の資料をそろえるとなると、博物館等との連携なくしてはかなり難しいのではないだろうか。現実問題として、毎日が大変に忙しい学校の先生方にとては、それだけの時間と労力を1時間の授業のために費やすことは非常に困難なものがある。また、授業に関わり感じことだが、子どもたちの柔軟な発想力や鋭い観察力には毎回驚かされることが多い。例えば「まが玉作り」の授業においては、「まが玉の形はどうしてアルファベットのCの形をしているのか?」「どのようにして石に穴をあけたのだろうか?」「古代人のおしゃれにはまが玉以外にどのようなものがあったのだろうか?」等さまざまな疑問を投げかけてくる。これらの疑問に対して、学校の先生がどれくらい的確に答えられるだろうか。大きく膨らんだ子どもたちの疑問に、その場で回答できるかできないか(回答するかしないかは別問題として)は、授業の深まりやその後の子どもたちの学校内外の学習活動にも大きく差が出てくるのではないだろうか。ここに、博学連携で取り組む授業の一つの大きな意義があると考える。

最後に、Q6において今後の博物館等を活用しての授業の希望について聞いてみたが、70%近くの子どもたちが活用を望む結果となった。これは、Q1・Q2の結果から比較すると、博物館等に対する意識が「出前授業」により大きく前進したことを意味するものであり、今後の子どもたちの自主的な博物館等の活用を期待できるものである。事実、その後に送られてくる感想等を読んでみると、多くの子どもたちが博物館や図書館等へ行き自分の課題を調べたいという意欲を持っていることがうかがえる。

以上、アンケートの結果を基に私見を述べてきたが、これから博物館はただ“もの”を展示し、人



を待っているだけではその機能を果たし得ない。積極的に外に開き、“もの”を媒介として各方面との連携・融合を推進して行くべきである。そうした中で、博物館自体の活性化も図られ生涯学習社会における社会教育施設としての存在価値が出てくるものと考える。なお、アンケートについては校数や人数も限られたものであり、実施校も意図的・計画的に割り振られたものではない。また、継続した調査でもないので長い目で見た子どもたちの変容やその結果については掴みきれていないところがある。今後、十分な調査をもとにさらに分析を試みたい。

### 3 博物館等と学校の距離を縮める「博学合同研修会」

今まで博学連携・融合の試みの一つである「出前授業」についてその効果を中心に述べてきた。しかし、当然博物館側が学校の授業に協力できる限界というものもある。館の職員体制や職員数の問題、学校の場所が館から遠く離れているために出向いて行くには困難であったり、学校の先生方との連携・融合に対する意識のずれの問題等である。これらの課題に善処し、今後博物館等と学校との関係を発展させていくためには、博物館等の職員と学校の教員が互いの連携・融合に対する意識上の距離を縮めることができが極めて重要なポイントになる。ここでは、当館が実施した博学合同の研修会から主に博学連携・融合に対する教師の意識について分析・考察したい。

#### (1) 博学が共に学ぶ場の設定

博物館の運営基準を規定している『公立博物館の設置及び運営に関する基準』では、「博物館は、利用者の教育活動に資するため、次に掲げる事項を実施するもととする」とし、その中の一つとして「資料の利用その他博物館の利用に関し、学校の教職員及び社会教育指導者に対して助言と援助を与えること」と明示されている。

当館では、平成9年度より社会教育機関の生涯学習担当者と小・中学校の教員を対象とした体験学習的な研修会を実施している。その主なねらいとしては①学校の先生方に博物館等の施設・設備や展示資料、事業内容等について具体的に理解してもらう②社会教育施設の職員と学校の教員が意見交換することで今後の望ましい連携・融合のあり方を探る③当館実施の体験的な学習である埴輪やまが玉の製作技術を学んでもらい各方面で活用していただく等があげられる。今年度も昨年度と同様に学校が長期休業中である8月4日と25日の2日間にわたり2部構成で開催し、県内各地から延べ78名（学校関係者69名、社会教育関係者9名）の参加を得た。今年度の内容は、次の通りである。

＜第1部 「埼玉古墳群とその活用」 8月4日＞

10：00～10：15 開講式

10：15～12：00 講義「埼玉古墳群とその活用」

（考古及び民俗展示室、将軍山古墳展示館の見学を含む）

12：00～13：00 昼食休憩

13:00～15:30 はにわの製作

15:45～16:00 閉講式

<第2部 「博学連携・融合」 8月25日>

13:00～13:15 開講式

13:15～14:45 事例研究「博物館等と学校教育との連携のあり方」

○指導者 大井町立東原小学校 校長 松尾鉄城先生

○実践発表者

行田市立埼玉中学校 教諭 佐藤元治先生

さきたま資料館 主査 田村宜也

15:00～16:10 まが玉の製作

16:15～16:30 閉講式



先生方も埴輪作りに挑戦



研究協議では活発な意見交換が行われた

第1部では、「埼玉古墳群とその活用」をテーマに、午前中にまず当館の概要や教育普及を中心とした事業内容について説明させていただいた。その後、各展示室を見学していただき、資料の内容や展示の様子の実際を確認してもらうとともにどのような活用が可能であるかを話し合った。参加者からは「博物館がこれほど多様な教育普及事業を行っていることをはじめて知った」「博物館の活用、博物館との連携という視点を持つと、いつもの展示も違って見えてきた」等の感想が聞かれた。午後からは、当館と同じ敷地内にある「はにわの館」(行田市)の協力を得て、はにわ作りの体験をしていただいた。実際にはにわを作るのは初めての方がほとんどであったが、子どもの目線になって授業の構成を頭に描きながら各自が製作に励んでいた。古代人の知恵や工夫にも改めて思いを馳せていました。1か月後に実施した野焼きにも参加され、今回の研修の成果をさっそく2学期以降の授業に生かした先生もいたようである。

第2部は、「博物館等と学校教育の連携のあり方」をテーマに、行田市立埼玉中学校の佐藤元治先生より当館を活用しての実践発表をしていただいた。この実践は、中学3年生の選択社会科で行われたものである。実践のポイントは①学習過程における資料館での見学・調査活動の工夫②資料

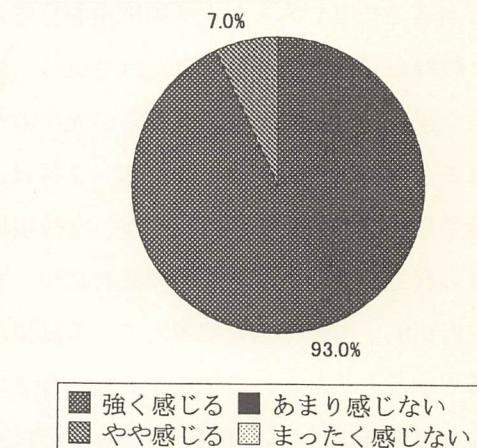
館職員とのチーム・ティーチングによる歴史的な見方・考え方の育成③地域素材の教材化である。当館との連携により、生徒の学習意欲が高まり主体的な学習が展開されたこと、学び方や見方・考え方方が培われたこと、休日を利用しての博物館等の活用が見られるようになったこと、生徒の発達段階を踏まえた系統的な指導計画の必要性等が報告された。その後の研究協議では、「貸し出しをしていただける資料一覧表や学習プログラムを学校側に提示してもらいたい」「博物館側にも活用後の成果や課題について知らせてもらいたい」「互いの連携を発展させるために教育委員会等の行政側の対応も必要である」等の忌憚のない意見が交わされ大変に有意義なものとなった。最後に、大井町立東原小学校の松尾鉄城校長先生より御自身の豊富な経験をもとにした博学連携・融合に対する考え方や今後の方向性について大変に示唆のとんだ御指導をいただき白熱のうちに閉会となった。

## (2) 博学の連携・融合に対する意識

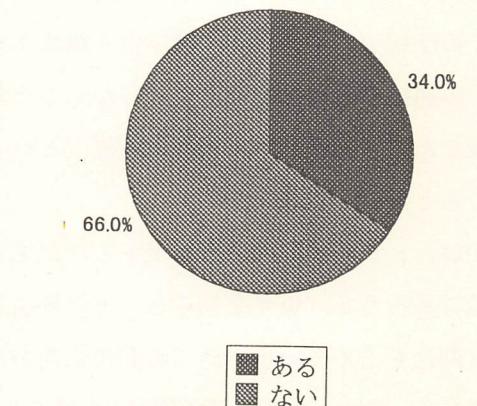
研修会へ参加された先生方の所属校であるが、多少の人数差はあるものの、一つの地域に偏らず、県内9教育事務所全てにまたがっていたことは大変に喜ばしいことであった。これは、博学連携・融合に対して多くの先生方が大きな関心と期待を寄せていくことの表れであると考える。しかし、小・中の別で見ると小学校44名に対して中学校25名であり、小学校からの参加者数が中学校の2倍近くにものぼっている。担当している教科別では小中学校とも社会科が圧倒的に多かった。これは、文部省から出されている学習指導要領や指導書社会編の中に、博物館等の活用を求めている記述が小学校に多く見受けられること、時間割の弾力的な運用が小学校は比較的容易であること、当館が人文系の歴史資料館であること等に起因しているものと思われる。しかし今日、社会の多様化・高度化したニーズに応えるべき、博物館等も多種多様化し多くの工夫や努力がなされてきている。学習指導要領等の記述に関わらず、双方の創意・工夫により多くの教育活動において博物館等の活用は可能であり、大きな成果をあげるものと確信する。

また、社会教育関係からの参加者は9名しかなく学校からの参加者に比べると大変に寂しいものであった。これは、絶対数が学校に比べて少ないと当館のPR不足にもよるが、社会教育関係者、特に博

Q1 博学連携の必要性



Q2 博学連携に基づく取り組み実施

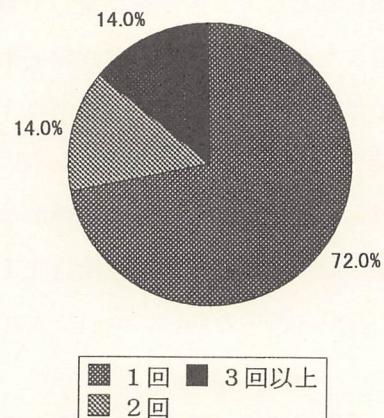


物館等の職員がまだまだ教育普及事業や学校教育との連携・融合に対する理解や意識が低いことへの表れととらえることもできる。学校教育と社会教育の連携・融合の重要性や必要性は改めて言うまでもないが、これからは学校のみならず内に対する啓発も大いに考えなければならない。以下、参加人数の関係等により一方向からの見方になってしまふが、アンケートをもとに博学連携に対する教師の意識や実態について分析・考察をしていきたい。なお、Q5に関しては、自由記述していただいたものを大まかな項目別に分類し、割合で表示したものである。

まず、Q1を見ると、博学連携の必要性を90%以上の教師が「強く感じている」ことがわかる。今回の研修会が自主的なものであることから考えてもこれは当然の結果であるが、その理由を見ると、ただ単に教科の学習効果をねらうだけではなく生涯学習という視点にたった考え方を多くの先生方が持っていたことは特筆すべきことである。これは、先の中教審や教科審等に見られる提言が、学校現場に受け入れられており、子どもたちの教育について多くの先生方が広い視野に立って考えている結果だと受け止めている。しかし、Q2を見ると、今までに博物館等との連携に基づいた取り組みを実際に実施したことが「ある」方が34%と、全体の3分の1にしかのぼっていない。さらに、Q3を見ると「ある」と答えた方でもその取り組みの回数はほとんどが年に1回というものであった。以上の結果から考えると、多くの学校や先生方は、生涯学習を踏まえて博物館等との連携の必要性を強く感じながらもその実施は困難であり、実施しても年に1回程度というのが現状であるといえる。

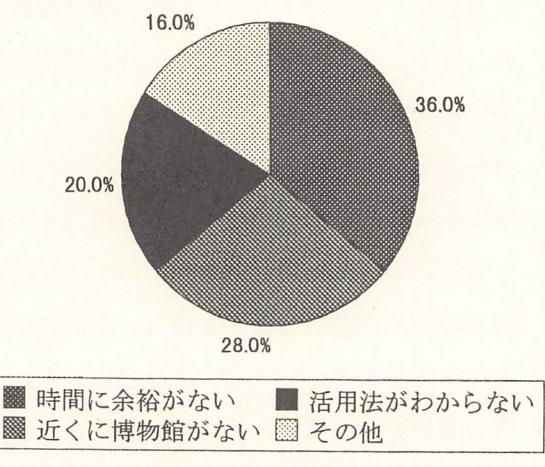
では、どうしてそのようなギャップが生まれてくるのであろうか。Q4を見ると、その理由として大きな割合を占めているのが「時間に余裕がない」とことである。確かに、現在の学校現場を見ると、第2・第4土曜休にともなう授業時数の確保が大きな課題

### Q3 年間の取り組み回数



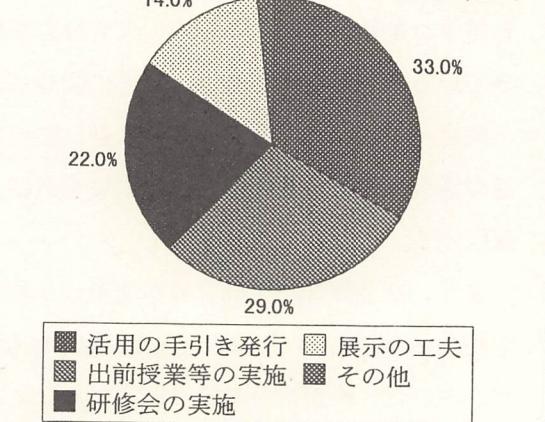
### Q4 博学連携の課題

※自由記述



### Q5 博学連携推進のための方策

※自由記述



となっている。また、教科指導以外にも生活指導や進路指導、中学校では部活動指導等も行わなければならず、仕事の内容は多岐に渡り、多忙極まりない毎日である。しかし、だからこそ他機関との連携が必要となってくるのではないだろうか。最初は大変であろうが、軌道にのれば学校教育のスリム化にもつながり、当然教師の負担減にもなると考える。また、授業日での活用が難しいようなら、休日や長期休業中における子どもたちの自主的な活動をうながし効果を上げる方法も考えられよう。博物館側としても一方的な連携の押しつけではなく、学校現場の実態を考慮しながら教師の過重な負担にならないよう配慮し理解を求めていく必要がある。

次に「近くに博物館等がない」ことも大きな原因となっている。これはQ2の結果とも深く関わっており、博物館等を有していない市町村の学校ほど連携・融合の実績がない結果となっている。おそらく、子どもの移動に関わる問題や他地域の博物館では連絡が取りづらい等の理由であると思われる。即効的な解決は難しいが、一つは前述の「出前授業」などは有効な手段となると考える。また、学校側も博物館側も意識の転換を図る必要があるのではないか。すなわち、博物館という形のある施設だけが博物館ではなく、街のあらゆるもののが生きた教材であり大きな博物館であるという考え方である。そのような目先にとらわれずに、大きな視野や長い目で博学連携・融合を考え、推進していくことも今後大切であろう。また、「どのような（どのように）連携が可能なのかがわからない」との意見も見られたが、これらの問題に対しては、博物館等の学校に向けての積極的な広報活動や教員向けの研修会、さらには博物館等の職員と学校の教員との連絡協議の場の設定など互いの意見交換や意志疎通を図る努力が一層必要である。

最後に、Q5より教師がどのようなことを博学連携の推進のために求めているのかを見てみよう。最も多かったものは「活用の手引きの発行」である。具体的には、博物館等を活用するにあたって借用可能な資料の一覧や学習プログラム、実践事例等を求めていているのである。その他、「出前授業や巡回展等の実施」が上位にあげられている。これらを総じると、博物館側に対しての要望が中心であり、博学連携・融合が博物館主体の考え方となってしまっている傾向が見受けられる。博学連携・融合とは「学校教育と社会教育（博物館等）が互いの役割分担を明確にしつつ、学習の場や活動など両者の要素を部分的に重ね合わせながら、一体となって子どもたちの教育に取り組んでこそ効果を上げる」（平成8年生涯学習審議会答申）ものである。つまり、互いの積極的な働きかけを基本しながら、その限界と自らの役割を自覚しなければならないのである。今後、博物館等と学校教育が対等なパートナーシップのもとに連携・融合を深められるよう努力していきたい。

#### 4 おわりに

以上、今年度の「出前授業」と「博学合同研修会」の実践をもとに、その成果と課題について思いのままに述べてきたが、最も大切なことは「次代を担う子どもたちにとって、今何が大切で必要なのか」ということである。子どもたち（学習者）の視点に立ったとき、博物館等も学校も「今何をすべきか」ということが自ずから見えてくるものと考える。

平成14（2002）年、新しい教育課程が完全実施される。中でも、小学校3年生以上の学年に創設

される「総合的な学習の時間」は、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」をはぐくむ上で重要な役割を担うものと大きな期待が寄せられている。この時間を展開するにあたっては、校内にとどまらず地域の豊かな教材や学習環境を積極的に活用することが求められており、今後益々学校教育における博物館等が果たす役割が重要になってくるであろう。

こうした流れの中で、これからは博物館等を単に見学や体験の場としてだけとらえるのではなく、自らの課題を求め解決するための“学びの場”としてとらえ、子どもたちの主体的な活動を保障していくことが博物館等の大きな使命となろう。そのために、博物館としての不易と流行を見極め、たえず適切な評価のもとに活動を充実させていく必要がある。今後、より意図的・計画的な評価のもとに的確な実態把握に努め、博学連携・融合の一層の充実・発展を図っていきたい。

末筆になりましたが、本実践を行いまとめるにあたり、快く御協力いただきました多くの学校及び関係機関、先生方に厚く御礼申し上げます。